

## 令和2年2月2日 二宮小学校意見交換会

出席者 14人

1 開会  
14:00～

2 挨拶  
森教育長

3 説明  
・永井指導主事 「第1回意見交換会で出された学校配置に関する意見の比較について」  
「小中一貫教育のメリット・デメリットについて」

4 意見交換

二宮地区住民：私の住んでいるところは東大跡地の近くで、学校の適地になるのでしょうか。高さも違うし、そんなに広さもない。町役場が来るといふ話があったときもちょっと変かなとも思った。それが適地なのかと納得いかない部分がある。初めて参加をしたので基本的なところはよく理解できていないが、何故施設一体型にしなければならないのか。小中が連携していくのは当然英語にしても専門科目にしても大事であると思う。検討したら一体にしなければならないということだけれど、それ以前に一体型にするということは結局、統廃合という話しになってくるので、学区の問題とか、通学できるかとか大問題になってくるのではないか。そこは拙速なのではないか。なぜ統廃合しなくてはいけないかの③の点で単級の学校は作らない。小規模校はあまり良くないという考え方のようだが、今の世の中は山村留学などして小さな規模でコミュニケーションを高めていくのも一つの方法だし、どうしても小さくなるから子どもの数も減るから統廃合しなければいけないというべきではない。

教育長：単級でも良しとする意見もある。実際に近隣で平塚の土屋小学校はずっと単級である。もちろん人間関係が良好な場合は全然問題はない。ところが単級となると6年間なり、子どもたちがずっと同じ環境の中で育つと、人間関係でもし万が一上下関係みたいな友達の中で人間関係ができてしまうと、それを6年間崩すことができない。学級編成ができれば、そこ

のところを取り換えることができるし、もし何か起きた時、例えば不幸な事故があったりすると、転校せざるを得なくなる状況が起こったりする場合もある。もちろん単級でも少人数で子どもたちを一度に見とることはとてもいいが、子どもたちの人間関係、幅広い社会性を身に付けるとか、コミュニケーション能力を高めるということであれば、やはり少し人数を増やした方が良いのではないか。

単級化を解消出来なくても、小中一貫で中学生を入れることができれば、学年を超えた異年齢の集団でもっと幅が広がる。教師側の立場からすると同じ学校でも規模が大きいとワークシェアができ、人が多ければ共有することができる。ところが単級だと例えば修学旅行を組むのであっても一人が、行程から、しおりから、子どもたちの動向観察から、グルーピングから、支払から全部やらなければならない。少しでも人数が多ければ、それをワークシェアすることができる。またそこに中学校の先生達が入れば教科担任制ということも、今文科省が進めようとしているような取り組みができる。

小中をそろえることによって、子どもの幅も増えるし、子どもを見とる教員の目の数も増えるし、単級を作らないといっても二宮はどんどん規模が少なくなっていくのは単級になる。少しでも多くの教員の力で、少しでも異年齢の子どもたちを混ぜて、多くの力で子どもたちを育てていきたいということで提案した。また、先生だけでなく地域の方の力も借りなければならない。コミュニティ・スクールにも取り組み、子どもたちを地域に出し、地域の方にも学校に入ってもらい、子どもたちをみてもらうという仕組みも始めつつある。とにかく大勢の手をかけて、声をかけて、手間をかけて子どもたちを育てていきたいという思いで提案させていただいた。

二宮地区住民：学校の先生が大変だということも分かる。複数の学級があれば、同じ学年の先生同士で話ができるし、中学校の先生が教育に携わる。そういう連携は当然必要だと思うが、何故それが統廃合なのかということが良く分からない。

部長：施設一体型の方が分離型より効果があり、分離型では限界がある。二宮町でも小中学校の児童生徒数が減少しており、施設も老朽化している。そして児童生徒数が減少している中で、5校を維持できるか考えていく必要がある。今、町では公共施設の再配置計画というのを作っている。それは学校だけではなく、町の施設全体を今後見直す計画です。その中には学

校も位置付けられ、ただ単に施設を減らすのではそれは統廃合になる。それではただ単に学校を合体して小学校を無くしてしまうことになる。そこに小中一貫教育に取り組む中で統合していけば、よりよい状況を子どもたちに提供できるのではないかと考えた。施設については統廃合ですが、そこに小中一貫教育という教育の内容が伴っている、それを今考えている。

教育委員：統廃合というのは結果で、最初にくるのは小中一貫であると考えている。私は長い間小学校の教員をやっていた。ほぼ二宮でやってきた。今は幼稚園に役員としてもかかわっている。幼稚園と小学校の連携、そして小学校と中学校の連携、言葉ではずっと言われてきた。私が若いときからでもう 50 年も前である。子どもは右へ行ったり、上がったり、下がったり、いろいろな変化をしながら育っていく。その中で子どもをどう見ていったらよいか。小学校の低学年で出た、例えば不登校の傾向、あるいはじめの傾向とか、中学校でも出る。そのようなことから、できれば長い間で子どもを見ていただきたい。小学校から中学校まで長いスパンの中で一緒に見ていく、中学の先生も小学校 1 年から見る。子どもの成長を考えた時にできるだけ長いスパンで見ていった方が教育がよくなるのではないかと、長い経験から考えている。あるいは工夫すればと、システムとして変えて行った方が良いと考える。

小田原市橘地区住民： 小田原市橘地区の住民です。前羽小学校はずっと単級です。下中小学校は今年度から 1 年生が単級化になって小学校で両方もずっと単級という傾向がほぼはっきりと出ている。小田原市と南足柄市を除く県西地域の町は全て中学校を 1 つにしている。真鶴町は現在 1 つの小学校、山北町は再来年度に 1 つの小学校にするので学校が縮小傾向にある。それは二宮町でも避けられないことで、関心をもって拝見している。第 1 回の会議から少なくとも今日の話まで教育委員会の方々が参加者に敢えて説明しないのか、説明する必要がないのか分からないが、小学校の(新)学習指導要領の改悪だと思っている。今までの小学校の教員免許では教えていない教科、例えば英語やプログラミング等が増えている。中学校の先生より小学校の先生の方が色んな意味で負担がかかる上に、教員の人数が少ないと校務が増える。それと分離型で小中一貫校にしても結局移動の問題もある。一体型の施設の中で学校を整理した方が良いと考える。一体型で整備して行きたいという方針を説明された方がよろしいのではないか。

二宮地区住民：質問です。1巡目の説明会で上がっていた声の中に「各校の交流をして下さい」というご意見があったと思う。どのように考えているか教えて欲しい。小中一貫教育を「やる」「やらない」以前に町内の学校間の交流を持つことをなぜしないのですかという質問があったと思うが、それについてはどうなったのかを教えて欲しい。

指導主事：例えば、小中の交流会であれば現在でも続けているが、おそらく現状よりも増やして交流してみたらどうかという質問と理解してよいか。

二宮地区住民：例えば小学校間の交流を持たせることは、子ども達にとっての成長に繋がるのではないかと思う。例えば音楽会でもスポーツ大会でもいい、同じ日に吾妻山と一緒に登るとかでもいい。各小学校もしくは中学校でもいい、学年だけでもいい。町内の同じ年代の子どもが集まる事で子ども達の成長にとって心が動くのでとても良い事になると思う。ちょっとした刺激でいいので切磋琢磨するのは、別に小中一貫をしなくても今でも出来る事だと思うので、こういう取り組みをしていただきたいと最初の説明会、意見交換会の時からご意見があったと思う。できることをやらずして、あがっている問題を解決するべきではない。出来ることをやりつつ、解決に導いていかなければいけない。これから学区再編とか可能性が残っている中で子ども達の交流が図られていけば不安の解消にも繋がるのかなと思う。保護者も町の人も大人として子どもをどのように育てるべきか、どういう風に子どもの環境を整備してあげられるか、施設がどうのではなくて、最初の意見交換会であげられた意見は大事ではなかったのかと思う。これまでの間に特に考えていないのですか。

指導主事：実際に実行まではいかなかったが、西中の生徒会の担当の先生が町内の各学校に声を掛けて生徒会と児童会、町内全体で交流をしましよと働きかけました。しかし5校の行事の予定や日程等を調整するにも難しく、学期の途中でもあったので、実現できませんでした。今言われたことは、町内全体を見て交流を深めることは素敵だと思います。あとは視点がずれるかもしれないが、教育長の冒頭のあいさつの中にありましたが、小中一貫教育のワーキンググループの中に「支援教育グループ」という支援級を担当する町内の先生達があります。今年度、支援級は小集団なので、いち早くやりやすいので、9年間の流れが、子ども達にとっても滑らかな接続がより必要とされる場面が多いので、小中で今まで1回であった交流会を近くの学校区ごとにお互い行き来しようということで回数を今年度増

やしました。沿ったお答えになったかどうかはわからないが。

課長：ガラスのうさぎというのがあるのですが、「平和と友情の集い」のときに毎年小中がそれぞれ一校ずつ出て合唱をしています。今年、高木敏子さんが集いにお出かけいただきました。偶然居合わせたのは一色小と西中でしたが、一色小の校長先生は大変良い経験であったと話されていた。総合教育会議の場でも、だったら高木敏子さんが被災された時の年齢である小学校3校の6年生を集めてガラスのうさぎで合同に歌った方がより自分の年齢の時に高木さんは父親を亡くした経験と今の自分をすり合わせるようになって良いのではないかという意見もでた。そのような取り組みにしたいが、立ちはだかるのは負担で、そういう意見も含め小中一貫の意見交換会の中で出ている。改めて校長なりに伝えさせていただくという事が出来ると思います。非常に参考になるが、今すぐ何か動いているものがないことは大変申し訳ない。

教育委員：それに関連して、確かに今までの慣例とか、先生方の負担とか、日程調整とか、様々な配慮がある。例えば幼稚園と小学校の関係、中学校の関係でいうと避難訓練だとか、引き取り訓練は独自では保護者が対応できない。そこで町内一斉で行うようになった。それと説明会、幼稚園と小学校の交流会、今までは一つ一つやっていたがまとめてやるようになった。確かにハードルは沢山あるが努力はしている。

二宮地区住民：中学校を3つに分けることは、今よりも人数が減る状況を作るのはどうなのか。中学校が1つに集まっていくことで、新しい出会いがあり、人生の中でリセットの繰り返しはとても大切だと教えてくれた人がいる。小学校から中学校になる時に環境がリセットされる。また高校に上がる時にもリセットされる。そして大学や社会に出てその中でもリセットされる。そこは必ず自分の中で出発点となる。それが学区再編によって、小中がそのまま持ち上がるというイメージだと思うが、それが本当にいいのだろうか。小規模の中でぬくぬく温めて育ててあげることは大事だと思うが、その先の長い人生を歩いていく子ども達にとってはどう何だろうか。もっともっと揉まれていた方がよかったりするのではないか。何か急いで決めることではない。例えば、15年後や20年後に新しい校舎を建てなければいけないというときがきっと来る。そこに向けて研究して、中身も伴い、施設も伴ったものであれば、それに向けて皆が一生懸命考える時間があるのではないか。早々に2,3年研究し

て、話がわつと沸いて、結局分からないまま、決まっていってしまうということは、ここから先を生きていく子ども達にとってとても可哀想な状況になってしまうのではないか。小中一貫をする事のデメリットを子ども達にとってのメリットに変えてあげられるような教育なのか探る必要がある。教育委員会の方や教育総務課の方は色々な学校に行かれて勉強をされていますか。

大原学院はなるべくしてなっていた。二宮町はそこまで逼迫している状況ではない。そんな必要な状況ではないのではないか。せつかく色々と考えていただいているが、まだまだ先でも良いのではないかと正直思う。

公共施設の再編が必要なのは大人の都合である。行政の都合であって、子どもたちにとって関係ないことである。一色小学校の単級化はずっと解消されないで来て、一色小学校の単級を2クラスにしてみる。町の負担で、そういうことが考えられないのかとか。やりようはいろいろあるだろう、学区の再編もまだ進まない、学区の再編をすると地域の摩擦があるからなかなかできないとかものすごく大変なこと。コミュニティ・スクールも始まっていて、学区の再編をしたらコミュニティ・スクールで一生懸命乗り出してくれた方たちは、ひょっとして違う学校のコミュニティ・スクールにならなくてはいけないとか。みんなが同じ方向を向いてはまだ行けないと思います。

どこを優先すべきだったのか、コミュニティ・スクールを始めてしまったがゆえに、地区はなかなか動かせなくなってしまうと思う。もっともっと研究して、話し合う時間が必要だと思う。例えば財政的に町にお金がないとよく言って、教育にお金をどのくらい使っているのか。ボロボロの体育のマットだったりとか、備品がボロボロだったりとか、学校からどういう声が上がっているかわからないが、子どもの環境を整えるのが先だと思う。大人の都合、行政の都合ではなくて、子どもファーストでもっともっとやっていただきたい。また、子どもに聞き取りをしてほしいと思う。特に中学生だったり、小学生の高学年だったり、ある程度きちんと意識をもって話ができると思います。アンケートは選択肢のアンケートだとおのずと方向性が導かれてしまうので難しい。アンケートが必ずしもいいかどうかはわからないが、記述式の部分も含めて。中学生にとってとても大切だと思います。子どもに寄り添って考えて欲しいと思う。

二宮地区住民:今は変える必要はないのかと思う。1回目も聞いているが、

小中一貫教育校はどれだけのメリットになるのかよく分からない。先生達の負担がどれぐらいなのか、減りそうもない具体的なメドがたっているのか。1年生が通う距離であれば保護者としては心配な所であります。

部長：一番早くて令和7年です。

二宮地区住民：早いというのはどういう根拠なのか。

部長:人数的にはこの表を見てもらうと、一枚目の表の下の方に各学校の児童生徒数の概ね 359 人から 710 人になる。一学年2クラスで単級にならない。今の出てきた校舎の形体に入る人数になるのがだいたいい令和7年度です。2校とか3校にした場合。この中で一番早いのがF案です。これは3校なので一校当たりの人数が少なくなります。

二宮地区住民：最短で令和7年に小中一体型が設置できると考えても学校によってはその5年後には単級化する。それは意味があることなのか。この先単級化してしまった場合どうするか、また同じような話しが繰り返される。とりあえず、たった5年しか複数学級が保てない、1年生で入って6年生で出るところには5年たってしまう。在学中の学校がどう動いていくのか、子どもにとってはデメリットしかない。ひょっとしたら5年後には新しい学校に入りましようとかなるかもしれない。このF案は確かに3学区に残れば子どもにとっては通学を考えればとても良いことかもしれない。しかし、10年後にはどこかが単級化してきて、割と早い間にそれぞれに単級化する状況になればいずれは、1校を考えなくては行けないという話になる。

部長：その頃どんな状況の単級になるのか。同じ質問が山西小学校でもありました。今の一色小の単級は小学校だけですが、一貫教育校になれば9年間で中学生も入るので、小学校に比べれば人数的に増えます。交流する人数が増える。単級かもしれないけれど、そこにかかわる教員の数が増え、コミュニティ・スクールも成熟していると思います。学校に入ってくれる人も増えてくるのではないのでしょうか。そうすると子どもたちにかかわる大人が増えるのではなんでしょうか。単級になるかもしれないけれど、今の単級とは状況が変わってくる。その状況がよければ、必ずしも単級が絶対いけないというわけではない。ある程度の人数は確保した方がいいということがあるから、単級は作らない方が良いというの

がありますが、その状況が悪くなければ数年続いてもいいと思ったりもします。

段階はあると思っています。段階はあって、I案の1校。これは40年先、令和42年と書いてあるが、それ位になってくると思う。人数が減れば1校ということで考えていかなければならない。40年後、50年後までいかないかもしれないが、目指していかなければならないことです。

富士見が丘地区住民：何故今急いで行わなければいけないのかが腑に落ちない。「5校を維持するのは無理です」と学校を減らさなければならぬという強い町の方針がもっと明確に出たら驚くと思う、仕方ないと思わざるをえないかもしれない。多くの人の意見を聞いて議論して、よい教育を作りたいということであれば、ものすごく大事なことである。何故そんなに急いでいるのかどういう方向を目指しているのか、聞けば聞くほど迷走する。何で今ここで、どうしても急いで、施設一体型で組み合わせやらなければいけないのかが、届かない、見えない。このままではみんなの中でなかなか納得のできるものは作れないという感じである。もし今どうしてもやらなければならぬ状況であれば、教えていただきたい。

教育長：相談しているのは5年先のことです。なぜ今なのか、今から相談していかないと先の見込みが決まらない。今決めたから今年の令和2年からということでは全くない。今道筋を決めておかないと教員も集めなければならぬ、それだけの準備をしなければならぬ。それから施設一体型の一貫校を作るにしても、学校教育目標を校長先生同士で擦り合わせて一本にしないと一貫とは言えない。取り組むことは沢山ある。その中で先生方はワーキンググループを作り小中一貫に向けて教科のカリキュラムを揃える作業をしている。分離型でもできるので今やっている。しかし子どもたち一人一人を見ていると、どんどん家にこもってしまう、外に出てこなくなってしまう。コミュニティの話があったが、地域に子どもたちを返す、地域の方に学校に入ってもらったりするコミュニティ・スクールが今年全部の小中学校で始まった。ただ学区をいじるとせっかくできたコミュニティが分散してしまうと問題が起きるのではとご指摘いただいた。また各コミュニティ・スクールの代表者が連携したコミュニティ・スクールの話し合いを持っていただいた。将来的には、子どもがどんどん少なくなっていく、まさにI案ではないが、町全体が一つのコミュニティとして、学校だって一つでいいだろうと言う

のももっともな話である。人口がどんどん先細りしていく中で、子供たちに提供できることは何か。特色ある二宮の教育を一步でも先んじて、アピールできるようにするために、今県内でどこも行っていない小中一体型の一貫校を作ること考えた。5年先には醸成して花が咲くようなシステムができればいいなと思う。

今回の案の中に出てきた義務教育学校は特別のカリキュラムを組むことが出来て、総合的な学習の時間を二宮町の特色ある教科として位置づけられる。やってみて成功すれば、他の小中一体型の小中学校でもやってみて、将来的には義務教育学校を3つ作って、最終的には一つになるという長期的なビジョンを考えている。過渡期として今やれることをやるのがよいと思う。

子どもたちが人と会わなくても生活できると冒頭に話したが、学校の中もそうである。ICTがどんどん入ってきて、タブレットで授業をするとか、先生とコミュニケーションをとって授業していたものが、タブレットを見て授業をすることがどんどん増えていく。そうすると折角集まって学校にきても会話が少ない、子供が人と会っても挨拶しない、そんな子どもを育てていいのかという思いがある。地域で育てるということもあるし、子どもたちに大人の力が入って、「放課後子ども教室」などいろいろなことをしてもよいし、やはりコミュニティで子どもたちを育てていく、その中で子どもたち同士でも、小学校の子どもたちと中学校の子どもたちを合わせることで、学校の中でも社会性をさらに広げていく、そういうのを今やるべきではないか、だから小中一貫教育を行いたい。子どもが自分の環境の中で満足してしまうと、そこからなかなか出ようとしない。例えば登校班で1年生から6年生が歩いていて、その道すがら1年生が6年生にどんな会話をしているかというほんの少しである。それを学校の中で1年生から9年生までいるとしたら、ちよつとでも言葉が増えるし、ああいう人もいるんだ、こういう人もいるんだと。名前も知らない6年生もいる。班の子どもの名前を知らない。ありえない。何でと聞いたら会話が少ない。登校中は喋れないが、集合場所でお喋りをするのはあつていい。地域の方におはようと言われたら、おはようと返せるような暖かい地域に育ててほしい。小学生と中学生の関係は、特に中学生にとって小学生が近くにいるということは、中学生は小学生に見られているという意識が芽生える。中学校の中にいると好き勝手である。中学生の様子を見ていて、仲間同士話し合ったりすることは大事である。学校の中にも個である。自分だけの世界で過ごしているような生徒も見られる。いろいろな人と一人でも多くの人と話し合いができ

るような場所を作ってもらえると良い。今すぐには出来ないかもしれないけれど、小中一体型の一貫校を作って、子どもたちの幅広い異年齢の集合の子どもたちを作りたい。

小中一貫ではリセットできる所が少なくなるという意見があるが、今考えているのは9年間で4・3・2のようにブロックに区切ってリセットさせたい。以前二宮西中学校で二宮サミットというものが行われた。二宮の町に対して何か提案できるものはないかというもので、みかん石鹸というものを作り、企業に依頼して花開いたことがあった。町のために何かを考える。それをそれぞれのブロックごとに行って発表会をしていくなど先の道筋ができればいろいろなことに取り組める。教育委員会として学校にこんな工夫、こんな準備、こんなことをしてもらえないかと言える。しかし、今のままでいいですよと言われると全く打つ手が無い。二宮で特色ある教育を進めるためにも、小中一貫教育の旗揚げをして、それに向かって力をつけていきたい。それでもっともっと工夫して、義務教育学校を作れるのであれば、子どもたちに特化して、支援教育を徹底的にやって子どもたち一人一人の本当の自分の人生のキャリア教育を進めることもやっていきたい。そんな夢がどんどん広がるが、そんなのいらない今のままでいいと言われると何も変わらない。いままでも小中が連携し協力して情報交換しようというが、必要最低限のことに止まってしまう。そこでは徹底的にやりたい。それを提案するにも小中一貫になるという目標があって、今のうちから子どもたちと一緒にやろうということになる。この間、一色小学校と山西小学校でボッチャという競技を一緒にやった。目標があればそれに向かっていろいろな工夫ができる。何もない今のままでいいのかということになってしまう。魅力をつけるためにもやって悪くないのではないか。

二宮地区住民：小中一貫教育は中学生にとってはどうなのか。自分が中学生の時は部活に打ち込みたいと思った。中学の時代は一番特殊だと思っていて、一番思春期で難しい時期、小学校と中学校では授業の時間でさえも違う。自分たちが授業をやっている最中に、校庭で遊ばれたらうるさいと思う。校庭でサッカーをやっている時に、防球ネットがあっても小学生がいたら本気でボールを蹴ることが出来ないような状態で部活は出来るか。

教育長:部活については、これからは1つの学校ですべてやるのは無理だと思う。広域の部活動が充実していると思う。

二宮地区住民：部活を行う場合そこまでの移動時間が生まれる。例えばサッカー部は、今週はこのグラウンドでやりましようとなった時に、そこまでの移動時間が生まれてきて練習時間が減ってしまう。また小学生も安心して遊べる場所である校庭が無くなってしまふのはデメリットになると思う。子どもにとってどうあるべきか。私が中学生だったら小学生が敷地内に居たら鬱陶しい。小さい子を面倒見なければならぬとか、そんなに交流の機会は一体型になったら増えるのでしょうか。そんなに面倒を見なければいけないのでしょうか。中学生が中学校生活を思いっきり楽しめばいい。中学校の先生も生徒も大変になって、思いっきりそれぞれの伸び伸びと出来る環境を作ってあげ方がありがたい。本当に人数が少なければおのずと一緒になるのは分かる。

部長：社会は大人から子どもまでいるのと同じで、若い人はお年寄りを気遣いながらとか、大人は子ども達を気遣いながら社会の中で生活している。それをそのまま学校に移すということではないが、やはり、9学年から1年生の中で、子どもの社会性を考えたら、お互いに気遣いしながら生活することも大事な視点と思う。うまく融合していくかが課題です。

二宮地区住民：完全に保護者の目で見ると、中学3年生が受験を迎える時に小学生が同じ敷地内に居るのは気が散らないのか。気が散らないようにするにはどうするのか。

課長：大原学院は9年生の隣に低学年のクラスが意図的に配置されていた。規範意識と言うか、お兄さんとお姉さんとしてしっかりしなければという気持ちが育つ様です。

二宮地区住民：休み時間に会議している声を通らないぐらいの騒ぎで、小学生は活動的である。声がまったく聞こえない。1クラスだったらよいですが。

二宮地区住民：小学生はいいが、敷地環境、校舎環境が整備されない限り中学生は嫌だと思う。

廊下はうるさくなって、校庭もうるさくなって、先生の言っている声が瞬時に聞こえなくなる位小学生のパワーはある。それは学校教育の中で重要なことを言っている瞬間だと、中学生としたら「うるさいな小学

生]みたいな感じになると思う。広い敷地があつて、棟が離れていたり、反対側が校庭であつたりしたら可能とは思ふ。給食の時間も何もかもが違う。小学生は良いが、中学生にとってはストレスにならないのかと思う。

部長：適正な人数はある。人数があまり多くて施設一体型の小中一貫教育校は難しいという課題はある。今すぐに1校で大きい小中一貫校は難しい。やるのであれば配置も考えなくてはいけない。

教育委員：実際大原学院に行った経験があるが、9年生の子ども達と食事をした。その時に私も同じことを感じていた。9年生のクラスの隣に3年生の教室があつて日々同じ生活をしている。その中で9年生のクラスが授業をしていると3年生の教室から授業をしている声が聞こえる。それについて子ども達に授業の時に「気にならないか？」と聞いてみると全然気にならないという答えで返ってきた。声とかは順応していくのではないかと感じ取った。9年生が3年生と一緒に掃除をしたり、もっと小さい子ともしている。給食は選抜された何人かが1、2年生の教室に手伝いに行ったりしているようだった。その時感じたのは、8年生、9年生を見ていると、低学年の児童に対して煩わしさを感じていないと思った。

二宮地区住民：大原学院は何人位いるのか。

教育委員：かなり少ない。小規模校でした。

二宮地区住民：授業から中休みに移る瞬間とかを、そこで勉強している立場で考えると、「うるさい！」と思う。二宮小学校は600人いるので聞こえなくなる。その状況が受験をする中学生達の日常になってしまう。それなりの防音設備対策を整えるのか。どのようにお金が使えるのか知りたい。防音対策ができるかとか。町が中学生のためにどこまでできるのかとか、設備をどこまで整えるのか分からない。例えばトイレの高さとか、黒板の高さとか、机・椅子の高さだけでなく日々過ごすためにどうなんでしょうか。

教育長：小学生の立場からすると、例えば小学生に「静かにしようね」と言うと抜き足差し足で歩いたりします。そのような思いやりの心は相手

の事を思いやって行動するのは大切だと思う。小学生でもできると思う。例えば全国学力・学習状況調査実施時に該当学年以外の学年は物音ひとつしない休み時間を過ごしたりできる。廊下を歩いても静かにすることができる。やらせれば子どもたちは出来る。思いやりの機会を与えることは子どもの情操教育に必要と思う。お互いに我慢することが、今世の中で非常に少なくなっている。お前やだからあっち行けとか言われる。それに対して言われた子は傷ついてしまう。そういうやり取りすらなければ、子どもは何も感じない。騒ぐと相手に迷惑になるか、分かるか分からないかは大きなことです。お互いに譲り合う、思いやる心を育てたい。これからは人と人とのふれあいがより少なる時代、身の回りの人に思いをはせる。

これからの社会はそこを問われているのではないか。コミュニティが大事だとか、触れ合いが大事だとか。

二宮地区住民：その間、小学生に我慢を強いる事になる。それは小中一貫教育でなくてもできる。

教育長：やってもいいのではないか。

教育委員：小学校の実態のとらえ方がおかしいのではないか。違うと思います。休み時間に騒がしいのは仕方がない。あるクラスはちょっと荒れているかもしれないけれど、少なくとも二宮小学校が時間通りで授業時間はきちんとしている。

二宮地区住民：休み時間に騒がしくなるじゃないですか。例えば中休みがあつて、20分間ある。騒いでみんな楽しく遊んでいるときに、中学生は授業をしている。

教育委員：それは工夫と思う。

課長：教育委員と指導主事は大原学院に見学に出かけています。部長は三鷹市の分離型を見学しています。義務教育学校であつたりして、施設一体型の小中一貫教育校はそんなに多く見に行けていないので、もっと現場を見に行かなければと委員会の中でも話題にしている。今、意見交換会をしていて、それをもとにしてすぐに、次の計画案を練ることはできない。我々ももう少し研究して、中学生の気持ちも聞いたら聞いたりし

て、どんな工夫をしているのかとか、研究しなければいけないと思う。来年度本格的に研究を進めたいと思っている。実践論として研究をやっていきたいと思っている。今はイメージしか作れないので、もうちょっとしっかりしたものを提示したい。それを示さずして小中一貫校の設置案の完成はしないと思っている。もう少し時間をいただきたい。

二宮・幼稚園の保護者：初めて参加している。今回こういう議論があるんだという事実を知った。東京に通勤しているので普段こういうことに触れることがない。小学校が2校になり通学距離が60分というのは大変である。通学距離を考えると3年生くらいまでは、3校あったほうがいい。勉強が難しくなる4年生から中学生までを東大跡地に変えられるのか、法律的に難しいのか聞きたい。

3年生まで小学校3校、4年生から中学生までが一緒にI案をイメージしていた。こんな割り振りもあってもいいのではないかと聞かしてもらった。

小学校3校は安全性の面で、3年生までは事故に遭う可能性が高いのと歩く体力的な不安を考えての意見です。

二宮・幼稚園の保護者：令和42年までいけるので、長いスパンの予算で考えたら反対に東大跡地新設というのはどうでしょうか。グラウンドの大きさは、広ければ広い方がいい。

乳幼児の保護者：初めて参加で、皆さんの話を聞けたらいいなという気持ちで来ました。疑問に思っていたこと、みんな思っていることは同じだなと感じました。子どもを育てている側とすれば、小さい子は、なるべく近くに通わせたいと思う。部活の事だったり、中学生は、大人が思っているよりも大人な所があったりするのでは、もっと意見を聞いてもみてもいいかと思う。

小中一貫校でのいじめの問題も、9年間同じ場所に通っていたら行きにくくなるお子さんもいるので、そういう部分はどうかと思。子どもが少なくなっから、学校が1つになってもいいかなと思います。そこで小中一貫を考えていくのもいいかと思う。

富士見が丘地区住民：子どもが登校班の集合場所で話をしていない。勝手なことをやっている。コミュニケーションをいつ取るのか心配になる。いざという時に、思いやることができるのか。その辺も意識して考えて

いったらいいのではないかなと感じる。